

天龍寺旧境内の堀

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



戦国時代の堀（北西から）

はじめに 渡月橋上流の大堰川 北岸には、小倉山が迫り、その東麓の龜山は緩やかに東に傾斜しています。このなだらかな龜山を背にして、天龍寺の伽藍が東向きに広がっています。このあたりは古くから人々に親しまれ、対岸には、名勝として名高い嵐山が借景として位置しています。

天龍寺は、吉野の地で亡くなつた後醍醐天皇の冥福を祈り、南北朝の戦いで犠牲となった人々の靈を慰めるために、足利尊氏が夢窓国師を請じて龜山殿の跡地に建立した臨済宗天龍寺派の大本山です。正式には「龜山天龍寺寶覺禪寺」と号し、京都では五山第一に列せられました。堂舎造立の資金には、天

龍寺船と呼ばれた中国・元への貿易船を派遣し、その収益を充てました。

史料によれば、天龍寺は創建後たびたび火災に遭っていますが、文安四年（1447）、「雲居庵のみを残し七堂・西廊が消失した」『臥雲日録』とあり、さらに、応仁二年（1468）、「兵火で天龍寺・臨川寺を含め一帯が灰燼に帰した」

室町時代の幅2.7m・深さ1.3mの南北方向の堀を発見しました。堀は石組で底部にも石を敷く構造で、断面の形は逆台形で、多量の焼土や焼け瓦で埋め戻されていました。

堀には3期の変遷があり、東肩の位置を同じくして段階的に規模を縮小していくことが判明しました。1期目の堀には水が流れています。南北両方向に延びていくことも確認しており、そ

の方向は天龍寺の伽藍配置と同じ方位の傾きでした。

史料によれば、天龍寺は創建後たびたび火災に遭っていますが、文安四年（1447）、「雲居庵のみを残し七堂・西廊が消失した」『臥雲日録』とあり、さらに、応仁二年（1468）、「兵火で天龍寺・臨川寺を含め一帯が灰燼に帰した」

室町時代の幅2.7m・深さ1.3mの南北方向の堀を発見しました。堀は石組で底部にも石を敷く構造で、断面の形は逆台形で、多量の焼土や焼け瓦で埋め戻されていました。

当初に造られた堀の底から出土した土器皿と、完全に埋没した状態から出土したそれは、ともに15世紀半ばから後半のもので、時期差はほとんどみられません。このことから、堀は短期間に埋没と



堀の南端の石組西側（東から）

修復を繰り返したとみられ、火災の記述とも一致しています。

また、堀の埋め土に充満する多量の焼け瓦は、周辺の瓦葺き建物や、壇敷きの仏堂に使われていたとみられ、火災の記録を裏付けました。

旧境内の堀 周辺では、戦国時代の堀（溝・濠）の発見例が多くあります。堀の種類には、今回と同様の石組構造などの堀と素掘り

の堀、水をたたえる溝や水のない空堀があります。断面の形は逆台形・V字形・U字形などがあります。特にV字形のものは「葦縄堀」と呼ばれます。幅は1m前後の小規模なもの、2m前後の中規模なもの、3m以上の大規模なものに大別されます。深さは1m前後のものと2m前後のものに分けられ、ともに深く掘り込まれています。これ



堀から見つかった焼け瓦

の場からは、15世紀中頃から

16世紀初頭の遺物が出土します。

以下、上の地図と照らし合わせておもなものを示します。東西方向の堀は3例あります。1は幅4.6mの大規模な石組構造で、水流が流れています。2は中規模で断面形が逆台形の空堀です。3は石組の大規模な薬研堀で、7が埋められた後に造られます。

南北方向は今回の例を含めて8あります。4は大規模で断面形が逆台形・V字形・U字形などがあります。特にV字形のものは「葦縄堀」と呼ばれます。幅は1m前後の小規模なもの、2m前後の中規模なもの、3m以上の大規模なものに大別され

れます。深さは1m前後のものと2m前後のものに分けられ、ともに深く掘り込まれています。これ

が逆台形の空堀です。西側の8よりも造られます。周辺で発見した堀（溝・濠）は、いずれも絵図との照合はできませんが、今後の資料が増えていけば、点と点が繋がっていき、堀の位置が復原できるでしょう。

また、堀が段階的に縮小していくことから、度重なる火災によって寺院が経済的に疲弊していく様子もみえます。

私たちが現在目にしている天龍寺東限の堀は、今回発見した堀と規模や石組の形状がほぼ同じで、あたかも戦国時代の堀が再現されているかのようです。

（小樽山一良）